

〔様式1〕

令和3年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和3年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体の正答率を見ると、全ての学年が全国値の平均を同等かそれを上回っているが、昨年度の校内の平均正答率を大幅に下回っている。観点別で見ると、「知識・技能」、「思考・判断・表現力」の観点では、全ての学年の平均正答率が同等かそれ以上なのに対し、「主体的な学習に取り組む態度」の平均正答率はどの学年も低い傾向にあった。昨年度はコロナ禍の影響で、以前の学習指導要領でいう「話す・聞く」の領域の単元はほとんどできない状況であった。また、話し合い活動にも制限があるため、国語科のようにコミュニケーションをとりながら問題解決することができず、児童の主体的な学習に課題がある。感染対策を講じながら、交流を深め深い学びを進めていき、単元の中で自己調整を図ることができるような児童を育てていく。
社会	学校全体(5～6年)の正答率について、5年生では全国値を上回ったが、6年生においては、平均正答率が60%と下回った。5年生は学習内容を概ね理解できており、基礎的な知識の習得や資料を読み取る力も身に付いていると言える。6年生はコロナ禍の影響もあり、国土や産業などの社会的な事象について、見学や体験など実際に肌で感じる筆が困難な状況であったことが、「知識・理解」の向上につながらず、観点別の正答率にも影響が出たと推察できる。身近な都道府県の地理や特産物など、資料を読み取りながら特徴を理解し、実際に見たり触ったりしながら「生きた学習」を通して意欲を高めていきたい。
算数	学校全体(2～6年)の正答率は全国平均をほぼ上回る結果となった。観点別で見ると「主体的に学習に取り組む態度」の項目において、すべての学年で目標値を超えているか同等であった。「知識・技能」の観点を見ると、どの学年も目標値よりも平均を超えていた。できた喜びによって児童は自信をもち、「主体的な学習に取り組む態度」の資質向上につながっていると考えられる。ただ、「思考・判断・表現」の観点を学年別に見てみると、3年生、6年生の平均正答率が目標値を下回っていた。量感や答えの見積もり、文章題を数直線で示すことなど、問題文を読んで数値をイメージすることが苦手な児童が多いことから、生活場面への置き換えや、複雑な数値から整数への変換、具体物を用いる等、児童の理解を図る工夫をしていきたい。
理科	学校全体(4～6年)の正答率は、70%近くで全国値平均とほぼ同等だったが、6年生においては正答率が60%を下回っていた。カテゴリ別の項目を見ると観点の「主体的に学習に取り組む態度」は学年が上がるにつれて目標値から数値が遠ざかっている傾向が見られた。自然事象の仮説を立証するためには、実験を行うことがカギとなる。しかしコロナ禍によって一人一人が充実した実験をすることができず、師範実験が増えた。よって「なぜ」が生まれにくく、子供たちの意欲や関心が高まりづらかったと推察できる。感染対策を講じた上で、子供たち自らが実験を行う授業を展開していくことで、児童の理解の向上につなげていきたい。

本校の教育目標
○よく考える子
○体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
<ul style="list-style-type: none"> <li>生きて働く「知能・技能」を習得する力</li> <li>未知の状況にも対応できる、思考、判断し、表現する力</li> <li>学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力</li> </ul>

学力向上にかかわる経営方針
<ul style="list-style-type: none"> <li>・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実</li> <li>・「できる」喜びが味わえる授業改善</li> <li>・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用</li> <li>・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進(きたコンの扱い方を含む)</li> </ul>

校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会(研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会)、分掌(授業改善推進プラン、図書館、GPO研修会[GIGA構想に係わる研修会])、放課後補充教室(学力フォローアップ教室)等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決型・探究型授業の実践</li> <li>・学習活動「振り返り」の充実</li> <li>・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり</li> <li>・十分な教材研究によるねらいの明確化</li> <li>・児童が主体的に取り組む学習活動</li> <li>・授業のユニバーサルデザイン化</li> <li>・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業時間確保のための学校行事の見直し</li> <li>・新学習指導要領解説及び小中一貫カリキュラムに沿った内容を、さらに独自に解説を加えた「要約集」の積極的な活用</li> <li>・次年度実施に向けた、生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの完成</li> <li>・放課後補充教室(フォローアップ教室)の充実</li> <li>・個別最適化をねらった学習タイム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTの活用を通して主体的に学ぶ児童の育成を目指した授業の実践</li> <li>・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観(ブロック会で事後検討)</li> <li>・GPO(きたコンの使用法・授業での活用方法などを全職員で行う研修)のサステナブルな計画の作成、及び実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施</li> <li>・評価規準や評価方法の工夫・改善(きたコンを利用したポートフォリオ評価の活用)</li> <li>・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成</li> <li>・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化</li> <li>・主体的に学習に取り組む態度の「自己調整」及び「粘り強さ」の具現化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校ファミリーで情報交換</li> <li>・地域の教育力の活用</li> <li>・ホームページの充実と更新</li> <li>・学校便りの発行(月1回)</li> <li>・80周年記念式典の準備、交流を通して学ぶ郷土愛・地域愛の育成</li> <li>・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用</li> </ul>

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 (5年)

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	基礎・基本は概ね定着しているといえる。漢字や物語の読み取りについては特に北区の平均を大きく上回った。一方、「話の内容を聞き取る」ことや「文章を書く」ことについては、もう少し定着が必要であるといえる。対話的な授業を多く取り入れたり、作文を書く等の指導が必要である。	聞く力の育成として、対話的な学習で多く取り入れる。意見の言い合いではなく相手の話を聞いて感想を伝えたり、質問を返ししたりと、相手の内容を踏まえたやり取りを行うことで聞く力を養う。また、文章を書く力の育成として、定期的に作文を書き、文章を書くことに慣れていく時間を設ける。	語彙を増やし、様々な文章表現を知るために読書の時間を充実させたり、新聞を読む時間を設けたりする。そこで得た語彙や表現を自分の文章に取り入れ、文章表現を豊かにできるようにする。
社会	実体験や、身近な事物をもとに学習を進めていく。社会における「主体的に学習に取り組む態度」はわずかに区の平均を上回ったものの他教科に比べ、ポイントが低く出ている。そのため、学習の見通しをもたせたり、ICT機器を活用して実際に体験できないことを見聞きできるようにしていく。	課題解決型学習を取り入れる。自分たちで課題を見つけ、資料等を活用しながら解決するという授業の流れを作る。そのために、導入の時に写真等の教材準備を行い、児童から「なぜ？」ができるようにする。そのような学習を繰り返していくことで主体的な態度を養う。	実際に体験できないような学習では教科書だけでなく、ICT機器を活用して調べることで、文字情報だけでなく、画像や映像で理解の定着を図る。また、児童が学習をしていく中で疑問に思ったことを自分で調べさせて深い学びにつなげていく。
算数	全体を見ると基礎・基本は概ね定着しているといえる。しかし、正答率度数分布を見ると、どちらのクラスも60点と80～90点を頂点とした山が2つできていることから、学習の定着に差があることが分かる。そのため、算数に苦手な児童の底上げを図り、全体として学習を定着させていく。	習熟度別学習を生かし、クラスの中に基礎・基本徹底コースを設け、算数に苦手意識のある児童には特に問題を実物で示したり、実際に計測してみたりと実体験を通して何を求めるのか理解しやすくする。	学んだことを生活のどこに生かせるか想起させながら学習を進め、学習が終わっても生活の中で学んだことを生かして問題解決をさせることで学習の必要性を感じられるようにする。また、高学年の学習は難しくなっていくので、学んだことを応用した数字のパズル等の時間を設け、楽しみながら考え算数への意欲の継続を図る。
理科	実験に意欲的に取り組み、「主体的に取り組む態度」は区の平均よりポイントが高かった。今後は、この実験・観察で何が調べられるのか、この結果から何が分かったかを自分の言葉で説明させることでさらなる学習の定着を図る。	身近な事象の実験・観察では、経験から予想させる等生活と結びつけながら学習を進める。また、授業の時間配分に配慮し、考える時間や実験・観察の時間を十分にとり、児童が実験・観察から得られた結果をもとに考察する時間を大切にす。	ICT機器を活用することで、結果を写真に残しつつも振り返られるようにしたり、実験だけでは得られない情報を調べたりと児童の学習を補助できるようにする。実験・観察から学んだことを生活で見つけ、身近な事物への興味・関心を高める。